「いずい」って何？

札幌市医師会
屯田横山眼科
横山　康太（よこやま　こうた）

北海道で眼科診療をしていると、「目がいずい」という主訴でしばしば受診される患者がいます。一昨年前まで横浜で診療していた私には馴染みのない表現でした。ネットで調べてみると「いずい」とは違和感や不快感、落ち着かない感じを表す北海道、東北地方特有の方言のようです。眼科領域で「目がいずい」と言われた場合、痒み・異物感・痛みとは微妙に異なる、説明しにくい違和感を指すことが多いようです。具体的には結膜炎やものもらい、ドライアイ、結膜異物などの眼表面疾患の場合に「いずい」と訴える患者が多く、必ずしも強い痛みや明確な症状があるわけではありません。

「目がいずい」の他にも、「胃がいずい」（食べすぎによる胃もたれ）や、「この日はちょっといずいです」（都合が悪い）のように、身体の不調や都合の悪さを幅広く表現する際に使用されることもあるようです。面白いですね。

目の場合は「何か入っているような」「しっくりこない」「ムズムズする」などのニュアンスを含みます。他の地域では「違和感」や「ゴロゴロする」と表現されることが多いため、道外で診療していた私には馴染みのない言葉だったようです。地域特有の表現を理解することで、患者とのコミュニケーションが円滑になり、的確な診断・治療へとつながります。最近では、「いずいんです」と言われたら、「いずいのですねぇ」と共感したり、こちらから逆に「今日はいずいのですか。」などと、聞いたりしています。「いずい」は上記の通り、何となく調子悪いみたいな時によく使われるため、重症感はないことが多いです。しかし、「いずくて目が開けられない」といった主訴で涙をボロボロ流しながら、目を真っ赤にして受診される患者もまれにいらっしゃり、一言で「いずい」といっても人によって幅があるのだな、と感じました。

「いずい」という言葉に出合ってから、診察室での会話が広がったように感じています。一言で「いずい」と表現される症状の幅は、患者の感覚の多様性を映し出すものでもあります。地域特有の表現を理解することは、患者に寄り添う姿勢につながり、診療の精度を高める一助となるものと考えております。

桐葉知秋の候

札幌市医師会
札幌いがらし人工関節クリニック
村上　俊也（むらかみ　としや）

「言を察して色を観る」という言葉がある。診察の妙味もこのようなものだろうと感じる。患者の言い分は往々にして修飾されている。余分をそぎ落とし生理を除いた中に病理がどれくらいあるかを考え、色や姿を観ながら知恵を巡らす。外来業務の比重が大きくなり、余計にそう感じるのかもしれない。結果がすべての医療においては、癪寐に思服せざるを得ない患者を抱えることがある。ここに医師の心労が同胞にしかわからない道理があり、私も長くそういう生活をしてきた。しかし最近、入院手術を任せられる人ができた。ときどき、私自身の執刀をせがまれるが、自分が行うのは外来手術のみ。ときに患者の手術痕をみつけ「〇〇も悪かったの？　手術の痕だね」「はい、先生にしてもらいました」「……そうだったかい」とかみ合わない会話もあるが、「老い」と「ぼけ」の差異を自問しながらも以前の心労とは比べるまでもない。

一方、意志にそぐわず多忙な診療を強いられる同輩もいるはず。その終わりが突然にきてしまうとしたら患者も不幸だろう。最大の医療資源は医師だから、その有効活用を考えたとき、世代間の継承は大きな課題となる。ところが、これに関する政府施策が皆無だ。かわりに怪しげなＭ＆Ａ代行が闊歩している。癌治療に携わる消化器外科医は減少し続け、20年後には半減するといわれ、外科医の周辺事情には憂いが多い。政府の医療費削減策、入院ベッド買取（410万円/床）には既に５万床の申請があるらしいが、米の減反と同じ、度が過ぎるとしっぺ返しを食らうだろう。昨年、外科系学会社会保険委員会連合は90％の手術で人件費が診療報酬を超えるという異常を報告した。償還不可診療材料費が診療報酬を超える術式が439件もある。米国製の医療材料は円安の影響で高騰し、保険医療材料でさえ約３割で購入費が償還価格を上回る逆ザヤ状態にある。人件費、委託費、エネルギーコストの高騰にあえぐ医療機関には価格転嫁という正当な防衛手段も使えない。外科医を育てるには時間も金もかかる。次世代の活躍の場を作る努力が必要だ。そう思いながらテレビを見ていると、人相の衰えた国会議員がいまだ政治家然として振舞っている。禄を食みながら曠職を貪る老いぼれほど醜いものはない。世に先生と呼ばれる人間は数多いるが、老いては子に従い、能力のある者には活躍の場を譲る。これが本当の夫子だろう。